

< 技術職（土木） >

Q. 国と比較して、仕事内容や給与、働き方などの違いはありますか？

A. 仕事内容については、配属される部署にもよりますが、土木職であれば大きな違いは無いように思います。基本的に工事を発注する立場ですが、国では市に比べると、工事や計画などの事業規模が大きいものが多くなります。給与については、若手のうちは大きな差は無いと思います。市職員の場合は市内での異動ですが、国の職員は2～3年で、なおかつ県をまたぐ異動になることもあるため、引っ越しなどが大変だと思います。

Q. 仕事のやりがいは何ですか？

A. 市民の方から感謝されることです。道路の陥没や、水道管の漏水などの連絡を受け、実際に対応し、感謝の言葉をいただける機会が多いです。土木職は市民との距離が近く、直接要望を受けて対応をすることができる職種だと感じます。

また、道路や水路などは、自分が携わった工事の成果が目に見えるかたちで残るので、やりがいを感じます。公園整備に携わっている職員は、将来自分の子どもが、自分が工事に携わった公園で自分の子どもが遊んでくれるのが楽しみと言っていました。ほかにも設計書を作り上げたときや、工事が完成した時には特に達成感を感じます。

Q. 土木職の職員は屋外で仕事をしているのでしょうか？

A. 工事監督として工事現場に足を運んだり、要望を受けた現場を見に行ったりすることはあります。また、道路の陥没補修や木の伐採など、自分たちで作業をすることも多少はありますが、基本的にはそういった業務を業者へ発注する仕事になります。そのため、設計など屋内でする仕事が多い印象です。

Q. 現在高校で測量を学んでいますが、就職後に役に立ちますか？

A. 役立つと思います。仕事で測量する機会は部署に関係なくありますし、測量が得意な職員は重宝されると思います。もちろん、研修や業務の中で学ぶこともできますが、入庁時からできるのは強みになると思います。

Q. ひとつの課あたりの人数は何人でしょうか？

A. 土木職は津市全体で約 260 人います。そこから 10～20 ぐらいの部署に分かれて仕事をしています。農業基盤整備課は 9 人で比較的少ない方ですが、水道工務課、下水道工務課など、30 人ぐらいになる所属もあります。人数が多い課では、担当ごとに仕事の内容が異なるため、実質 5～8 人ぐらいの班で同じ仕事をしているます。

Q 土木職は女性が少ない印象を受けますが、人間関係は良いですか？

A 津市の土木職の女性職員は 12 人で、比較的若い世代の職員が多いです。女性だからといって、特別扱いされたことはありません。職場の人間関係は良好に感じます。10 代から 60 代まで、幅広い年齢層の方々と一緒に働いていますが、年の近い職員も多いため、相談もしやすいです。ノルマ等が無いからかピリピリしている職員はおらず、温厚な方が多いように感じます。

Q. 異動のときに不安に感じたことはありますか。また不安を解消するきっかけは何でしたか？

A. 異動については、数年に一度あり、自分の希望を出すことはできますが、必ずしも希望する部署に行けるとは限りません。そのため、高校や大学で学んでこなかった分野の仕事に携わることもあります。入庁時や異動時は不安を感じるとはありますが、その部署で以前から働いている職員が仕事を教えてくれるので、安心して働けるとは思います。私も入庁時、どんな仕事をするのか全くイメージがわいていませんでしたが、先輩職員が丁寧に教えてくれたので、不安が解消されました。

また、土木職は研修が充実しており、その部署に関係する研修や CAD の研修、退職する職員からの技術伝承研修もあります。どの仕事も必要となる知識は共通しており、これまでの部署で学んだ知識や技術が他の部署でも活かせるため、異動したからといって全く新しい仕事を一から取り組むわけではないです。

Q. 残業はありますか？

A. 土木職に限らず、また国縣市に関わらずあると思います。年度末の繁忙期や工事発注の締め切り前には、土日に出勤することもあります。また、工事の地元説明会等は平日の夜遅くや土日に行われることも多いため、残業が必要になります。

Q. 休暇は取りやすいでしょうか？

A. 取りやすいように感じます。現場に行く予定や、来客予定等がなければ休むことができますし、休んだからといって周囲に何か言われることはありません。また1時間単位でとれる休暇もあるので、早退して通院等をしている人が多いです。お盆休みはありませんが、5日間の夏季休暇があり、まとまっては取りにくいものの、十分に休暇は取れるように思います。

Q. 職場環境で不満に感じることはありますか？

A. 国と比較して、リモートワークが進んでいないと感じるところはありますが、市では窓口対応や現場対応など、市民に身近な業務も多くあるため、仕事内容的にリモートワークが向かないという点が進んでいない原因の一つだと思います。